

渡英以後のヴォルテール

川 西 良 三

ヴォルテールの作品はガルニエ書肆のモーラン版で全集冊數五十二冊に達する膨大なものである。フランス文學史上でも、個人作品の總量に於てこれに比肩すべきものは殆どない。このことはヴォルテールの場合まことに自然な結果であつた。それは一には、ヴォルテールが中年より始終病氣を訴へ、骨と皮とに瘦せ細り、宿痾の痛風と、時に發する水腫とに苦しみつゝも、瘦木枯木のごとく八十四年の奇蹟的長壽を得たことによる。そしてまた、その間、彼が異常に多作豊産の性で、不斷の執筆により叙事詩、諷刺詩、小説、論文、隨筆、悲劇、歴史等多方面に活動が及んだことによる。彼の文學の一重要部門としてみられるそのコレスボンダンスにしても、従來はモーラン版に収録された約八千通として知られてゐたが、最近スイスのヴォルテール研究館 (Institut et Musée Voltaire) の蒐集したものがさらに數千通加はることになり、Theodor Besterman の業績が注目されてゐる。したがつて、ヴォルテールの文學を研究するならば、その原典の讀破だけでも多大の時日を要することになる。

しかしながら、彼の作品はすべて明哲きはまらない文章で流れる如く書かれてゐる。「淺い川は透いて見える」といふ諺りもあるが、讀み易いといふ彼の名文の偉力は否定され得ない。後年に彼が「スピノザさん。あなたの思想は言はれる程危険ではない。何となれば、あなたの本など隅から隅まで讀む人は歐洲に九人とゐない。」と言つたと傳

へる如きも、彼が萬人に讀まれ得ることの威力を自覺してゐた事實を示すものである。

ヴォルテールに關しては、その哲學思想、政治的意見、さらにそれとからんで歴史著述の部面と、以上を先に本誌の六卷四號に論じておいた。残るところ、悲劇と哲理風小説と詩とであるが、これらについては、紙面の都合上、全くの概要しか述べることができない。

まず、悲劇について言へば、ヴォルテールに對する當代の期待はまことに大なるものがあつた。十七世紀コルネーユ、ラシーヌの巨歩を繼ぐものが、おそらくヴォルテールであらうとは、當時の何人も信じて疑はなかつた。然るに、この方面に於ける彼の光彩は年とともに薄れ行き、今日では十八世紀悲劇の「擬古典主義」といふ芳カシヤしからぬ名稱と呼ばれてゐる。ヴォルテールは劇的契機の把握と芝居の仕組みとには素質十分であつた。しかし、舞台上の成功を念とし過ぎたので、十七世紀古典主義の眞髓たる心理描寫を主とするよりは、むしろロマネスクな筋の構成に裏身をやつした嫌ひがあつた。彼の悲劇の中では、親子が相別れ、また奇蹟的にめぐりあふとか、兄弟でありながらそれを知らずして近寄るとかの波瀾場面に富んでゐる。この點は、我が國の歌舞伎十八番に似たところもあつて、劇場に於ける効果を狙ひ過ぎた感があつた。その結果、クラシックの簡素な形式的集約を離れ、多彩な刺戟的場面を羅列することになつた。彼自身、シエクスピアに對しては批判的でありながら、その影響を多分に受けてゐる。しかしながら、人物の性格的對立、激情危機の描寫、美德の顯揚、貴族王侯による壯大崇美な場面の展開等、大筋に於てはクラシック悲劇から傳承したものが多し。心理推移の觀察と描寫との不十分な點に於てのみ古典悲劇に遜色を見るのである。Oedipe, Zaire, Tancrede, Merope 等は今日に於てもコメデイ・フランセーズの上演題目たるを失はない。ヴォルテールは「劇への情熱」を生涯持ちつゞけ、この面に於ける成功は彼の最大の念願であつた。彼の行くところ、シレに於ても、ハリに於ても、フェルネに於ても、常に邸内に舞台が設けられ、訪客もすべて舞台への参加を求められ、演出の練習、試演の發表に寧日ない有様であつたことは餘りにも有名である。

しかしながら、彼自身の確信や、當時の大喝采にかまはず、ヴォルテール悲劇に對する一般の評價は、その後に前述のやうな下落を見るに至つた。彼の悲劇はラシーヌのそののやうに不朽であるとは言へないであらう。今日、それよりもつと大きな、もつと異論のない成功を見てゐる部門は、彼の數篇の哲理風小説である。この部分は今なほその隈々まで一般に讀まれ親しまれてゐる。その代表的なものは Babouc, Zadig, Candide, Ingénu 等である。もとゞ、何かの思想的骨子があつて、その理念を織込み主張するために小説をつくり、これが作品としてひどく成功したといふ例は少いのである。ヴォルテールはこの困難なジャンルに於ても獨特の成功を収めた。人物の肉づけや心理づけや人間化の點では充分であつたといへないが、輕快な筆致ときらめく才智とはその最後まで讀者を引きつける力を有してゐる。佛語を學習したほどの人は皆ザディグやキャンディドを讀み知つてゐる。ヴォルテールの作品中でもこの一角のみは現代でも不斷に讀者を有してゐる。それら作品のテクニクはヴォルテールに獨自のものであつて、皮肉、輕妙、洒脫な彼の眞面目を示してゐる。

その一聯の小説群に於ては、バブツクやザディグ等初期のものは現世肯定の樂天的傾向から出發し、後期のキャンディド、アンジェニユでは悲觀的厭世的傾向に走つてゐることが指摘されてゐる。このやうなヴォルテールの人世觀の色彩の變化は興味深い事實である。その原因としては、中年ごろよりの彼の人世に於ける失意墜落の連續が、人世を暗く眺める方向にたどらしめたによることは言ふまでもない。王室の勸氣の解けぬこと、シャトレ夫人の死去、ベurlinでの失望、健康の惡化、その他數々の失意が重つて、名聲財産ともに惠まれたヴォルテールさへなほ打ちのめした人生の苦がさがそこに表現されてゐる。ルソーはヴォルテールのこのやうな變化を實に意外として「リスボン災害の悲歌への答」の中で次のやうに言つてゐる。すなはち、「あなたは榮光につままれ、富裕のただ中に暮らしてゐる。文名の不朽も確實でありましょう。あなたは靈魂の性質といふやうな問題で哲學的に悠々と論議してゐなされる。もしもあなたが身體が弱く氣持が浮かぬとしても、名醫であり親友であるトロンシモンといふ人が側についてゐる。

しかもなほ、あなたはこの地上の至るところに害悪のみを見出してゐる。一方、私は實に無名で、貧乏であり、病氣になつても手當さへろく／＼受けられない。それでも、私は寂寞の中で獨り思索し、人生に肯定的見解をとつてゐる。一見して奇妙なこの對比はどうして生じたのでしよう。その理由はあなた自身にも説明がつくでありましょう。あなたは人生を現在に於て享受し、私は希望のみで生きてゐます。希望はかへつてすべてを美化するからです。」と。ルソーの言は或る點では皮肉であり、きびしい批評をこめてゐる。しかし、人生の眞實はその邊りに存在してゐると見るべきであらう。現世的な繁榮や特權的な享受が、他面に於てその維持繼續の苦心と喪失の危惧とに於て不安焦慮の種となり、むしろ人間の幸福を害ふといふことはあり得ぬことではない。佛諺に曰く、「幸福ならんためには、微賤にして世に隠れ暮らすべし」と。人間の幸福感なるものは、現世的獲得の多いのに比例するといふやうな單純な理によるものではない。

さて、ヴォルテールの作品の部門別の概説は以上の程度にとゞめ、次には、彼の生涯に於ける特に注目すべき轉機の三四に就いて考察を加へることにしたい。(ヴォルテールの生涯に關する傳記的研究では Desnoiressterres の Voltaire et la Société du XVIII^e siècle の八冊が最も權威あるものとして今日でも準據されてゐる。)

彼の生涯では、その渡英(一七二六—二九年)と「哲學書翰」の刊行とまでを、期間として、一括してその形成期と見なすことは可能である。すなはち、ヴォルテールの形成が渡英によつて一應の完結點に立至つたことは事實として全く疑ひない。この渡英の動機は、市民出身の彼が權門の一貴族と争つて敗れ、擧句の果てには投獄までされ、釋放後に外遊を強制されたことから發するものであつた。その結果、彼のフランス舊制度に對する反感が高まり、彼にひそんでゐた多くの傾向を一時に發現したものであると言はれてゐる。

しかし、眞相をいふならば、彼はそれらの思想上の傾向を専ら渡英によつて獲得したのではなかつた。出發前の作品たる Oedipe や Henriade にはすでにその傾向の大部分の姿を示現してゐたのである。したがつて、彼の渡英は

單に舊制度 (ancien régime) 下の母國フランスへの批判を促進した役割にとどまるといふべきであらう。

さて、フランスに歸つたヴォルテールは、幾分かの慎重を押しつゝ、その活動を再開する。その中に、「英國便り」の發表 (一七三四年) とそれに附隨させた「パスカルのパンセエへの批判」は多大の物議をかもし、教權側の激怒をまきおこし、逮捕状も發せられる形勢となつたので、彼はロレーヌに逃げた。やがて、シャンパーニュ地方のシレーに移り、シャトレ夫人の邸宅に居住する身となつた。以後十數年の間、ヴォルテールはなほ各地に旅行することもあつたが、主として女友シャトレ夫人の邸に隠れてゐたので、この時代をシレー時代と呼んでゐる。この期間に最も主要な事實はシャトレ夫人との交友であつて、これは十六年の長きに及んで居り、著作に學究に社交に夫人は影の形に添ふ如くヴォルテールに従ひ、その活動を扶けたのであつた。この女性は母性的な庇護の精神に富んでゐたので、ヴォルテールが例の皮肉辛らつて向ふ見ずの戰鬪的な諷刺文を發表しさうになると、そのひどく冒險なものは原稿を保管して出させないやうなことが一再ならずあつた。たとへば、「ラ・ピュセル」の如き、夫人は諫止して、決してこれを陽の目に當てなかつた。この時代にヴォルテールを物理學天文學の研究に導いたのも、夫人の一つの政策的な配慮であつた。ヴォルテールを政治宗教の論争の渦中から幾分かでも遠ざけてその安全をはからうとする趣旨であつた。

ルイ十五世はヴォルテールの人物及び思想を好まず、これを多く近づけなかつた。しかしなほ、ヴォルテールに國家資料編集官と王室通常侍臣との稱を與へたのは、ポンパドヴール夫人、ドルジャンソン郷のはからひの他に、シャトレ夫人の各方面への運動があづかつて力があつたによる。

さて、渡英の原因となつたロアン・シャボ事件の屈辱は彼の深く肝銘するところであつた。さて、この際、階級上の不利をカヴァーし、貴族等に負けない立場に達する最も確かな一つの徑路は、彼らと全く同等の經濟力を得ることであつた。ヴォルテールはこの目的をしつかりと意識して資本蓄積に心がけるやうになつた。その方面の努力はシレー時代からひそかに進行してゐた。

ヴォルテールの後年の巨富は有名な事實であるが、それを積立てた徑路は、勿論、すっかりは分つてゐない。これについて諸説の傳はる中、確實な事項は次の如くである。彼は當時の商業主義資本主義の先進國たるオランダ、イギリスには夙に外遊してゐたので、その經濟組織をよく學んでゐた。そして、この知識を佛國に持ちかへり、實地に活用することに大いに意を用ひた。彼にとつて最初の機會となつたのは、市公債の償還に對する計畫的な投機であつたと傳へられてゐる。その後、公債投資はヴォルテールの常套手段であり、時價の變動を巧みに利用し投機して殆ど常に成功つゞきであつた。彼は機敏な實務家的素質を父から繼いでゐたし、若い頃にその方面の勉強をさせられてゐることも大いに彼立つてゐたといふ。當時の公債といふものは今日の有價證券に似た性質を備へてゐたので、價格變動も大きかつたらしい。この他、小麥商デヌムランと組んで、フランス産小麥の輸出で利益を収めたこともあつた。

かうしてできた巨大の富も、その頃のヴォルテールは常に動産形態に保存してゐた。後年に彼はフェルネの地に定着するやうになるが、それまでにはパリに歸還したい希ひが熱烈なものであつた。したがつてパリ以外での不動産收得などは全くその念頭になかつた。シレー時代からも彼はしきりと次々の旅立ちに出てゐるので、その特別製の四輪馬車には席に裝置をしてあつてその中に彼の全財産を詰めこむことができるやうになつてゐた。彼は金塊も證券も契約證書もすべてこの中に詰めこんで持ちまはつたと傳へられてゐる。しかし、正金は多く保持せず、これを悉く投資し、もしくは貸付けてゐた。ヴェルテンベルグその他の諸侯には多額の資金を用立てし、元本の償還無しで、たゞヴェルテンベルグ侯への融資だけで十五萬リーブルにも達したといふからヴォルテールの富力もうかゞひ知られよう。

旅行の途次、馬車の扉をひらく従者の態度には、高名な文學者に對するといふ以外に、異常に大きな富に對する敬意がこめられてゐたと傳へられる。ヴォルテールは單なる名聲を追ふ以外に、近代社會の實力要素を身につけ、獨立自尊の地位に立つことを念としたのである。その富を處置するに當つては、「富は死蔵すれば罪惡であるが、活用し

社會に働かせて居れば正義である。」といふ式のモーラルに安んじてゐた。資本主義の弊害とか矛盾とかの批判的反省は彼の考への中に未だ存在してゐなかつた。

時期としてシレー時代につゞくのは彼のプロシヤ行きである。しかし、右に述べたやうに富力の蓄積途上にあつたヴォルテールとしては、單に生活上の見地からは佛王に頼ることも特に必要ではなく、いはんや外國の王にすぎるともなかつたのである。しかるに彼がプロシヤ王の侍臣となつて赴き、數年間のドイツ生活を送つたことには、その前後の事情につき究明すべき點が伏在してゐる。

この點では前稿にも若干の説明をしておいたやうに、啓蒙合理の新思想により輝かされた君主を通じ哲人政治を行ふことが彼の素志であつた。しかし、佛王ルイ十五世はヴォルテールを用ひず、その不敬度を嫌ひ、また側近の權力筋も彼を排斥してゐた。この間に、新興プロシヤの王フレデリック（フリードリッヒ二世）は、早くもその部屋住み時代からヴォルテールに尊敬を寄せ、しばしば丁重な手紙を發してゐる。彼は、單に文通するにとゞまらずこの文豪をポツダム宮に招き寄せ佛語詩文の教師とし、且つは彼自身の文明君主の聲價を飾りたいと希望してゐた。ヴォルテールもまたいんぎんに返事し、フランスに於ける文明開發の責務とシャトレ夫人との交情深きとの故を以てプロシヤ行きを辭退しつゞけた。兩者は不斷に文通して相互に賞讃し、一方が對手をフランスの Vergilius と呼べば、他方は對手をソロモンと名づけ、雲にまで持ちあがる風があつた。しかし、この文通もまた、フランス王の耳目を不愉快に刺戟しないでは濟まなかつた。

その中に、多年ヴォルテールの精神的支柱であつたシャトレ夫人が一七四九年九月に他界した。このことはヴォルテールにとつて大きな打撃であつた。彼はその心の空虚を如何にして埋めるかに思ひ悩んだ。今では彼をフランスにつなぎとめる愛情的な紐帯が存在しなくなつた。彼は、シレー時代にいつしか蓄積されてきた多大な書籍、理科實驗器具、彫刻、繪畫、裝飾家具などを荷車數台に山積して、一たんパリに向ひ、トラヴェルシエール街の室に入った。

しかし、フランス王宮の空氣はどこまでもヴォルテールに冷たかつた。彼の嘗つての同情者であり同盟者であつたポンパドゥール夫人も、ルイ王の寵愛の安定した今となつては、周圍の空氣に反抗してまでヴォルテールをかばふ要はなかつた。それよりはむしろ、堅苦しい敬信の周邊と同調する方が身の安全であると感じるやうになつてゐた。

しかもまた、同じ史料官として取るにも足らぬモンクリフが王の信任を得て居り、王の居室への自由出入を許されてゐるのに、ヴォルテールにそれが認められてゐない。これもまた、彼には心おだやかでない事からであつた。他方障害となつてゐたシャトレ夫人の逝去とともに、プロシヤ王の招きはますます急である。ヴォルテールの心は動いた。外國に赴いて手厚い待遇を受け、故國の反對者どもを見返してやりたいといふ考へに傾いてきた。

事實をいへば、彼はプロシヤ王に對して幻影を懷いてゐたのである。その人物の變轉きはまらない行動の氣象を見抜いてゐなかつた。この英邁な王は、他面に於ては、朝アツクにこやかに握手しておき、夕には冷靜な政策的計算から對手の向ふ脛を打拂ふことも、何ら意に介しない性分であつた。以後のヴォルテールはそのやうな裏ぎりによつてしばしば苦澁をなめさせられてゐる。

さて、話はやゝ前後するが、一七五〇年の決定的なプロシヤ入りに先立ち、それまでにも彼は短い期間のプロシヤ訪問をしてあつた。一七四〇年には彼自ら一つの外交上の役割を買つて出て、ドイツ帝カール六世の急逝後の政局に於けるフレデリックの行動を打診する用向きを含み渡普した。これには佛國の權力者カルディナル・フロリーの諒解が存在してゐた。しかるところ、普王はその腹裡をむざ／＼と看破されるやうな人物ではなかつた。そしてまた、ヴォルテールは盛大な歓迎攻めの中に眞の用向きも忘れがちで、裏面に於て着々と進行してゐる事態に何ら氣がつかなかつた。普王は軍國擴大の好機をとらへることに何の躊躇もなく、その訓練しきつた軍隊をすでにシレジャの地に進入させてゐたのである。それを知つてからもヴォルテールは、おめでたくも拍手喝采の詩章を贈り、「シレジャの何と幸ひなことよ」と表現した。フリードリッヒの軍國主義的なことも、以後ブレスラウの單獨講和の不信も、すべて

ヴォルテールは見きはめて居ない。彼の盲目的なプロシヤ王讚美は後世史家の心證を大いに害し、彼の史家としての眞價を疑はしめる結果となつてゐる。

次に、ヴォルテールの一七四三年のプロシヤ訪問には、佛政府の方から申出て、彼に一の使命を授けようとした。佛政府の方では普王と親しいヴォルテールになほ利用價値を感じてゐたし、彼もまた佛國に忠誠を示し信用を挽回するの必要を感じてゐた。用向きは先と同じく、錯雜せる國際情勢下にプロシヤの眞意を探らうとするにあつた。右の默契が成立すると、佛政府は、相かはらずヴォルテールを不快視してゐることを公示するために、悲劇「セザールの死」を發表禁止處分に付するといふ猿芝居を演じた。しかし、もちろん、普王はそのやうな見せかけの術には乗らない。王は佛國內に多數のスパイを潜入させてゐたので、すぐにその策略を嗅ぎつけた。そして、ヴォルテールがアカデミー入りに失敗して、フレデリックに書き送つたエピグラムを勝手に、一部改變し、ルイ十五世のことを「最も愚鈍な王」と罵らしめ、これをパリ市内に流布させてみた。しかるところ、パリの警察は何らこれを取上げず、またそのエピグラムの中で同じく槍玉があがつた人物も、當局の要請によつたものらしく、この件では何の聲もあげなかつた。これで佛政府とヴォルテールとの結託は明らかとなつたが、フレデリックは何喰はぬ顔でヴォルテールを迎へた。そしてその翌日からこの遠來の顯客に對し、かなり無作法な嘲弄的な態度をとつてみた。しかるに、ヴォルテールは日ごろに似ず辛棒強く、なほ、王がドイツ諸侯と會議するためにバイロイトに行くのに、進んで隨伴を懇請した。王はこれを認可したが、ヴォルテールには誤つた情報信じさせ、これを逆用する有様であつた。この時以來、普王はヴォルテールに對し内心にやゝ侮蔑を感じ、ヴォルテールはまたやうやく普王の二重人格性を悟るやうになつた。しかもなほ、それから以後七年、讚辭交換の文通はつゞけてゐたし、フリードリッヒを哲人政治の君主と考へる幻影はヴォルテールの念頭から去つてなかつた。このやうな點では、彼は忘れっぽい性分であつた。

さて、話はもとにもどり、一七五〇年七月、ヴォルテールは今度は長期に及ぶ滯留を決心しつゝ、ベルリンに到着

した、彼は直ちに普王の侍臣に任命され、年俸二萬八千フランを支給されることになった。以後の生活と、決裂の事情と、ヴォルテールの再歸國の時のフランクフルト事件等に就いては何人も知つてゐる。その足かけ三年は彼にとつて苦がい経験であつた。批評家ベルソールもまた、ヴォルテールの生涯中から不快な部分を削除するとなれば、このプロシヤ時代を切りとりたいと言つてゐる。しかしながら、ヴォルテールはたゞ一つの點では普王に全く満足しきつてゐた。すなわち宗教上の思想に於てであつた。王は眞底に於て無神論者であり、サンサーシー宮の食卓では宗教に對する痛烈な批判が遠慮なく展開されてゐた。このやうな光景はフランスでは期待できない。「カトリックの坊主ども」を毛嫌ひするヴォルテールにとつてこの點は快心の雰圍氣であつた。なほ一七五三年に彼がプロシヤを去つてからも、交通のみは最後まで繼續し、兩者は時に儀禮的の賞讃を交はしてゐる。それは二人とも對手の高名につながることになほ相互の利益を感じてゐたことに他ならないのであつて、再び接近するといふ氣持はさらさらなかつた。

ヴォルテールのプロシヤ脱出に當つては、姪のドニ夫人を驅けつけてフランクフルトの苦しみを惧にしたことは人の知るところである。ドニ夫人はすでに一七四五年から未亡人となつてゐたので、共に暮らす對手を持たぬこの二人が、老ひ行く身を寄せ、慰めあひつゝ暮らすのは自然でもあつた。しかし、一七四九年まではヴォルテールの身邊にシャトレ夫人といふ女友がついてゐたから、ドニ夫人は不快に思ひ、幾分の反感を持つて、遠くから眺めてゐた。シャトレ夫人が死ぬとヴォルテールは直ちに姪のことを考へ、彼の方から招きの手を差し伸べたが、その時にはまだ兩者の氣分が熱せず、ヴォルテールは一人プロシヤに向ふことになつた。

しかし、フランクフルト事件以後、二人は自然と最後まで共に生活することになつた。この姪は氣性も容姿も幾分卑俗な人物で、派手な交際を好み、騒がしい性分で、また年に似ず色情沙汰も多かつた。それで幾多の波紋を身邊にまきおこしたし、ヴォルテールに迷惑をかけたことも多かつた。しかし、もとゞ、波平らかならぬ、曲折の多い、騒がしい生活の方がむしろヴォルテールの環境であつたとも言へる。ドニ夫人が彼の晩年に演じた側近の役割もヴォ

ルテールの傳記に賑やかさを加え、無意義ではなかつたと考へられる。

さて、ヴォルテールはマイアンスやマンハイムを経て、ストラズブルグに達したが、それからいづこの方角に向ふかに心迷つた。パリには直行できない。彼が佛國を離れた時には、直接に王の許しを得てゐたのであつたが、全二年に亘り隣國の王の庇護下に移行してゐたことから、佛王が彼の歸還を快く迎へてくれる筈はなかつた。しかしまだ、多少の望みは残つてゐたので、パリにゐる友人たちから宮廷の意向を確めてゐる際であつた。北佛ではルーアン市のシドヴィルが呼んでゐるが、パリを素通りしてそこへ赴くのは敗北感が伴ふ。諸侯の邸城をめぐり歩くことも、もう再びこれを行ひ得る年齢ではない。

この時に當つて、明らかにフレデリックの不信行爲と見なされるものが介在した。すなはち、一七五五年十二月にヘーグとベルリンとの二書肆が彼の「シャルルマーニよりシャルルカンに至る世界史要約」を勝手に出版し、しかも文章の一部を改變し、フランス宮廷に不快なやうに仕組んであつた。これがフレデリックの指し金ガネによることはほど明白であつた。普王はヴォルテールと佛宮廷との再接近を阻止しなければならぬ數々の心情的もしくは現實的の理由を有してゐたものと信じられる。

その中にまた、ヴォルテールの例のラ・ピュセルの詩篇の稿本が、いつしか彼の手を洩れ、パリで印刷されて秘密に賣買され始めた。かうなつては、彼としても最早パリやヴェルサーユに赴くことを斷念する他はないやうであつた。その頃、スイスからは彼に對して多くの招きの手が差しのべられてゐた。しかし、スイスもまた嚴肅なカルヴィニスムの國土であるから彼は逡巡を重ねなければならなかつた。彼はコルマル、プロンビエールに滯留した後、南佛に向つた。一七五四年末、リヨン市で目立たぬやうにリシユリニ卿と遇合した形式となし、パリの狀況、王室の意向などをつぶさに聴取した。この結果、パリに歸することは當分見込がないと觀念し、つひにスイスに赴くことになつた。

ヴォルテールは十二月にジュネーヴに到着し、一七五五年にはデリースの莊に落着き、一七五八年にはヤム佛國內に入つたフェルネの莊宅を入手した。彼は一七六〇年頃から全くこの山村の人となつた。文運盛んな彼は、このフェルネの最晩年二十年間で文學的王座の絶頂に達するのである。彼の創作活動は、七十才を過ぎてからもますます活氣を加へ、とどまることを知らない。キャラ、シルヴァン事件でその社會的影響力も増大した。名聲は全歐的となり、各國の王者も競つて文通を求め、文人墨客名士諸侯のフェルネ訪問はひきも切らない。この間、彼はこの山村の産業や地理開發にも心を用ひ、彼が到着當時人口五十だつたものを、彼ひとりの力で人口千二百とするやうになつた。

文學者としてのヴォルテールの素志は殆ど全面的にかなへられた。しかもまた、彼が八十の坂を越えてなほかくしやくと文學活動をつづける様は驚異であつた。さて、この間際になつて、彼のたゞ一つの不満は、この三十年間見ずゝにゐるパリ市へ歸る機會を恵まれないことであつた。

然るに、一七七四年にはルイ十五世の逝去があり、情勢はヴォルテールにとつて緩和の方向に向つた。新王ルイ十六世は彼に對して先王ほどの強い嫌惡を持つてゐない。皇后マリー・アントワネットは、不信心ぎらひな母マリー・テレズの警告あるにも拘らず、ヴォルテールの悲劇作家としての盛名に大いに憧れを寄せてゐる。教權方面も一種の弛緩状態にある。今こそ、彼のパリ歸還には大きな障害がなくなつたやうに感じられてきた。彼はなほしきりと逡巡したが、ドニ夫人など側近が寒村フェルネを嫌ひ、パリの華やかさに慣れてゐるし、ヴォルテールの最後の愛兒ともいふべき悲劇「イレーヌ」が運命の上演を控へてゐる際でもある。この上演の成功のためには、彼自身がパリ市にあらはれて、一般の喝采と興奮讚美とを巻きおこし、反對派を壓伏することが是非必要であると進言する人々があつた。この考慮がつひに彼のパリ訪問を決心させるに至つた。

一七八八年二月、ヴォルテール一行がパリにあらはれるや、すさまじい熱狂感激の歡呼が彼の身邊を包んだ。その宿舎には内外の名士が踵を接して訪問し來り、アカデミーもコメデイも創設以來空前の榮譽をこの「偶像」に捧げ

た。ヴォルテールが馬車で道行けば、隨所に興奮の渦が波打った。一つの傳へ話に次のやうなのがある。チュイェルリの入口で雑誌を賣つてゐた貧しい一婦人はヴォルテールがロワヤル橋を通行し群衆の歡呼を浴びるのを見た。彼女は人々をかきわけて彼の方に突進し來り、「情深いヴォルテールさん、私に本を書いて下さい。私は貧しい女です。私をあはれんで、本をつくつて下さい。お願いです。さうして下されば、私はすぐ金持になります……」と叫んだといふ。

従來、毅然としてヴォルテールを指弾しつゞけてきたパルルマンもソルボンヌも、今では一般の空氣に押されたもののやうに、何の意思表示もなし得ないで沈黙を餘儀なくされてゐた。ルイ十六世の宮廷も苦がい表情であつたが、ヴォルテールが初めに法令により追放されてゐたものでもなかつたから、この場合に打つべき手を知らなかつた。ヴォルテールがこのやうに神格化されたことと、ボマルシェの劇が熱狂を以て民衆に迎へられたこととは、まさに舊制度が蹴落されようとする前徴的予感を伴ふものであつたと言はれる。

しかしながら、この間に、殆ど八十四才に近い高齢のヴォルテールは、日程の無理と興奮の過度とがたゞつて、健康上の危局に直面するやうになつてきた。

さて、舊教の支配力の強大であつた佛國では、その生前の不敬虔のゆゑに教會が埋葬を拒否した場合には、屍體の處置に窮しなければならなかつた。その昔ヴォルテールが親しくしてゐた名女優アドリエンス・ルクヴロールは、一七三〇年に死去したが、教會はその屍體引取りを拒否した。そこで、人々は餘儀なく、之を荷車で運び、塵埃處理場に遺棄した。その事件の思ひ出はいまだにヴォルテールの記憶に生まゝしい。

彼ヴォルテールも、久しい間カトリック教會に敵對してきたから、死後にそのやうな取扱ひを受ける可能性が大であつた。彼は内心に於て常々それを懸念してゐた。萬一に備へて、フェルネの莊宅では彼は禮拜堂を自力で設け、安易な私設の司祭を身邊に近づけてゐた。そこで、フェルネの地で死去するならば、まづ問題はなかつた筈である。し

かし、彼は遠くパリに出て最後のけんらんたる生活を飾つてゐる最中に、咯血、浮腫、不眠、膀胱結石などの諸症を併發し、今や危惧すべき状態に立ち至つた。(死期の迫つた頃のヴォルテールに就いては Frédéric Lachèvre の研究が精細を極めてゐる。Champion, 1908.)

これよりすこし以前に、友人のグランペールは彼に對して次のやうな忠告をなしてゐた。すなはち、「もしも死期が近づいたならば、生存中教權に逆つてゐたフォントネルやモンテスキュも最後にさうしたやうに、結局は一般の風習に従ふべきである。」と。ヴォルテールはこの忠言を容れる考へに傾いてゐた。

この際、パリに到着して間もないヴォルテールのもとに一通の手紙が届けられた。これは舊ジエズイット派のゴテイエといふ神父からであつた。この人はヴォルテールの文才には多大の敬意を寄せてゐたが、不信心のゆゑに墮ちんとするヴォルテールの魂を救ふことに多大の關心を持つてゐると述べ、會見を求めてきてゐるのであつた。ヴォルテールも、萬一の場合、パリのごみ捨て場に棄てられぬやうにと用心しておく必要を感じてゐる。そこで、この手紙が眞情にあふれ、切々の言辭より成つてゐることに好感をおぼえ、會見してみる氣になつた。

約の如く、神父ゴテイエは二月二十一日午後、ヴォルテールの宿舎にあらはれた。この時、内外の名士三百人もがそこに押しかけてゐた。ヴォルテールは急激な疲労倦怠を口實として來客全部を追ひかへし、やがて神父と一室で會見した。神父が切々として魂の救濟を説く間ヴォルテールは炯々たる眼で對手を見つめながら傾聽し、何の反抗も示さなかつた。そして、對手が全く個人の發意で來て居り、他意のないことを確信して、次の會見を約し、この人物と別れた。

二月二十五日、突然に激しい咯血が始まつた。(その死後検査では肺に何の異常も認められず、肺病に因するものでないことは確かなので、この咯血については諸種の説がある。)そこで、二十八日には神父ゴテイエを枕頭に呼び求め、懺悔告白の聽聞を依頼した。神父はサンシユルピスの主任司祭の認可を得た上でヴォルテールの病床に來たが、まづ書式によ

る所説取消しが必要であると申渡した。ヴォルテールは一枚の紙をとりあげ、神父の眼下で次のやうな文章をさら／＼と書き認めた。すなはち、「……今し、主が私を召したまふならば、私の生れたカトリック教の中で死にたいと思ひます。私のもろ／＼の過ちをゆるしたまふやうに主のあはれみをねがひます。そしてまた、私が教會を誇つたことがあれば、主と教會とにゆるしを乞ひます。」と。そして、この紙片を神父に手渡した。

しかるに、この咯血は二十日ほどしてから奇蹟的に治り、彼はまたすべてを忘れたやうに激しい活動を再開した。

五月に入るとまたも容態が悪化し、月末にはつひに命旦夕に迫る状態となつた。そこで、ヴォルテールの肉親の甥の神父ミニョはゴティエ師に急を知らせた。三十日夕刻、ゴティエ神父はサンシュルピスの主任司祭と同道して來り、カトリック教のこの巨大な敵をその最後の時に完全に降伏させもしくは歸依せしめる決意を胸にいだきつゝヴォルテールの病室にあらはれた。ヴォルテールにはその所説取消の文書をさらに確認させるつもりであつた。二人は彼の枕頭に近づき、「ヴォルテールさん、あなたはその生涯の最終の段階に直面してゐる。あなたはイエス・キリストの教へを信じますか。」と尋ねた。數日來の苦悶をつゞけてゐた病人は起き上らうと努めつゝ、「イエス・キリスト」とその名を二度發し、何ごとかを言はうとして、次に力盡きたることく、「私を靜かに死なせて下さい」と頼んだ。したがつて、二人の神父はそのまゝ退出せざるを得なかつた。その夜、ヴォルテールは従者モーランの手をとりつゝ死んだ。

最後に於ける歸依の證しが不十分であつたとの理由で、サンシュルピスの主任司祭は神父ミニョの依頼をはねつけヴォルテールの埋葬を拒否した。次にミニョはパリ地區の主任に交渉してみたが、テルサツクといふ人物も斷乎として受けつけなかつた。甥のミニョ及び周圍一同は困惑の極に達した。今ごろから遠くフェルネの墓地へ屍體をつれもどすことは不可能であつた。ミニエ神父自身はトロワ司教管區のセリエール教會の會員であるので、最後の一策として、急ぎそこまで運ぶことを決心した。とりあへず、屍體移動の許可をテルサツク主任司祭に懇請し、これを文書に

得た。かくして、その死亡の翌日三十一日に、ヴォルテールの屍體は夜陰の中にパリの東南を目ざし四十里の急行進の旅をするのである。晩年二十年を除いてはその生涯放浪しつゞけたヴォルテールが、死亡してからもこのやうな旅をしてシャンパーニュの野原を走つたことは奇異なる運命であつた。

セリエールの教會では、修院長はヴォルテールの作品及び思想について何らの知識を持つてゐなかつた。そこで、その屍體移動認可書と告白聽聞證明とを見て深くは怪まず、舊知のミニエ神父の依頼に應じ、屍體埋葬を許可した。時に六月二日の朝であつた。遅ればせに、ヴォルテールの遺體來ると聞いたトロワの司教は、セリエールにも埋葬禁止を通告してきたが、すでに事後であつて如何するなかつた。しかしながら、ヴォルテールの遺體のその後に就いては諸説が行はれてゐる。

ヴォルテール研究の角度は無限に多い。ジャン・ジャック・ルソーとの關係、百科全書派との關係、キャラ事件の展開、シルヴァン事件の意義、その他の諸事項について筆者は心を残しつゞも詳説することができなかった。

ヴォルテールが出現して大きくゆすぶられたかに見えたカトリック教も、百年の後には舊に復し、嵐一過して何の變化もなかつたとアンドレ・ベルソールは述べてゐる。

——關西學院大學文學部助教授——